【下沖谷地(旧一日市村)】

「オキ」は海、海浜の意や広い田畑、平野。広い田畑の中央部。家の後方に対して前方、山の方に対して川の方、奥などの意もある。「ヤチ」は低湿地帯。

1987年三浦鉄郎著 新編･秋田の地名

おしきり【押切】

おしきり

もとの村名 押切は 洪水にて押し切られたるより出でたる名称。

大正2年6月編纂 一日市村郷土誌

おしきり

「キリ」は切り開くという意。すなわち新開、新墾、という意味。

1987年三浦鉄郎著 新編･秋田の地名

おしきり

ここでは「洪水で押し切られた」という意味より「新たに開墾した村」という意味のように思うが。

作者の憶測

押切村址

村の起源不詳。天正5年（1577）、三浦五郎盛季が押切城主となる。三浦氏は馬場目から市神を移し、押切の畦道に一日市をたてた。これが一日市の地名の由来とされている

「郷土伝統文化調査報告書」1984.1.26八郎潟町商工会

おしきり

この近くに一日市村の基盤を作った押切城があった。五城目の朝市の発祥の地、馬場目村町村は馬場目城主が檜山の安東実季軍に滅ぼされた後、市が閉鎖し一時この押切村周囲に移ったといわれる。このことが一日市という名のそもそもの起こりとなったと思われる。　その後、押切城主は臣下の小和田甲斐により暗殺され、城を乗っ取られたが小和田親子が変死し、廃城となった。

押切城のお家騒動の中、市は五城目の砂沢城下に移ってしまった。押切村址は農面道路の馬場目川近く、潟側の水田の真ん中に残っている。

（作者）

おしきり〈八郎潟町〉

馬場目川の河口部北岸低湿地に位置する。一日市の西に接する。

〔中世〕押切村。戦国期に見える村名。出羽国秋田郡のうち。天正19年正月17日豊臣秀吉が秋田実季の当知行を安堵した朱印状写に「おしきり村・白水沢村・横町村・満さか村・立すミ湊村」184石余とある（秋田家文書）。「慶長6年秋田家分限帳」では、栗沢弥五郎の代官所支配の村として、「湖東通北押切村」50石余と記載（同前）。押切村の北に押切城があり、城の北は夜叉袋村・蒲沼村・原添村なので、押切村の北方に北押切村があるとみるよりは、両村が同一の村であったと推定される。押切城は馬場目川河道や沼地と中島を利した水城的な平城であり、天正年間に旧浦城主三浦盛永の遺子五郎盛季が安東（秋田）氏庇護下に築城したと伝えられる。一日市はその城下町的存在。城址は東西440m・南北900mで、濠の幅40～60m。昭和20年代に埋め立てられ、田畑となる。なお、城の付近には、浦城城下から移した花嶽山万頭（石頭?）寺や三浦義包の霊をまつる若宮八幡社もあったという（雪の道奥・雪の出羽路）。

〔近世〕押切村。江戸期の村名。秋田郡のうち。秋田藩領。「正保国絵図」「元禄七郡絵図」ともに蒲沼村のうちに包摂されていたとみられる。しかし天和4年「黒田高帳」で村高367石余・当高353石余（うち本田175、・新田178）、宝永2年「黒印高帳」で村高181石余・当高164石余と認定された黒印村である。享保年間の郡村改めで、蒲沼村とともに一日市村に包摂、その枝郷となる。羽州街道の整備により、寛文2年一日市村が宿駅場に指定されてから、当村の人家は宿駅場付近に移住。同10年頃には人家移転完了というから、上記黒印高帳は田畑だけの統計となる。正保4年段階で押切村家数13軒という（明和7年記録写　富山家文書）。村名は現在、小字の押切として伝わる。